

# ナガダボール

だい かいちゅうがくせいじんけんさくぶん  
第65回中学生人権作文コンテスト  
さいゆうしゅうしょう かんさい ほつそうしゅう  
最優秀賞〈関西テレビ放送賞〉

みねづかちゅうがっこう ふくだ よしき  
峰塚中学校 福田 祥己

## 「最幸の人生の終い方」

はんとし まえ ぼく そふ はい  
半年ほど前、僕の祖父の肺にガン  
が見つかった。発覚時、そのガンは  
まだ手術によって切除できると言わ  
れ、僕も母も、祖父は当然手術を受  
けてくれるものと思っていた。だが、  
祖父は手術を拒否した。それどころ  
か、ガンに対するすべての治療をせ  
ず、無治療で行くという選択をした。  
「せっかく手術ができるのにしないな  
んて！」と母は残念がったが、「最期  
くらい好きなことをして、尊厳をも  
って迎えたい」という祖父の気持ち  
を、結局は受け入れた。

「尊厳死」と「安楽死」という言  
葉がある。人間である以上、いつか  
は必ず死を迎えることになるが、必  
ずしも自分が望んだ形で死ぬことが  
できるとは限らない。この二つの言  
葉は、何となく似ているが、実は全  
く違う。「尊厳死」には自分の意志が  
反映されている。重い病気になって、  
治療を受けてもその先に死が待っ  
ていることが分かった場合、積極的に  
治療を受けるのか受けないのか。意  
識がなくなった後、延命治療を受け  
るのか受けないのか。自分で決めて  
周囲に意志表示ができるのだ。死に  
対してポジティブなイメージがある。  
一方、「安楽死」は、もう助かる見込  
みのない人に、これ以上の苦痛から

かいほう せつに せんたく  
解放するために施すものだ。「安楽  
死」にも色々あって、延命治療を行  
わずに自然に死を迎える「消極的安  
楽死」は「尊厳死」に近い形だが、  
自分の意志が反映されていないとい  
う点でネガティブな印象だ。

ぼく そふ よねんまえ そふ おな  
僕の祖母は、四年前に祖父と同じ  
ガンで亡くなった。祖母の場合は、  
発覚した時すでに末期だったので、  
手術もできず、抗ガン剤でガンを小  
さくし、少しでも長く生きられるよ  
うにするしかないと宣告された。抗  
ガン剤を断れば、命の期限は半分に  
なってしまう。もうそこに祖母の意  
思が入る余地はなかった。抗ガン剤  
を使わなければ生きられないのなら  
と、半ば押し切られる形で祖母は治  
療をスタートした。抗ガン剤は、多  
少の効果あげてくれたが、それ以  
上に祖母の体力と気力を奪った。ガ  
ーデニングが趣味だった祖母は、暑  
い日も寒い日も庭仕事をかかさな  
かった。ところが、薬の副作用のせい  
で体力を落として、一人では歩けな  
くなった。そして庭に出ることもで  
きなくなった。生きがいを失った祖  
母はほとんど口も利かなくなり、そ  
こからは坂を転がり落ちるように悪  
くなった。「人権」という言葉をネ  
ットで調べてみると、「人間が人間  
らしく生きる権利」「すべての人々  
が生命と自由を確保し、それぞれの  
幸福を追求する権利」とある。祖母

さいご かぞく みと しずかに な  
は最後、家族に看取られて静かに亡  
くなった。人として尊重され、大切  
にされる権利は行使されたが、最後  
の一年、祖母らしく幸福を追求でき  
たかという疑問が残る。もしあの  
時、抗ガン剤をしていなければ半年  
しか生きられなかったかも知れない  
けど、大好きな庭で祖母らしく幸福  
を追求できたかも知れない。そんな  
心残りがあるからこそ、母は祖父の  
決断を受け入れたのだろう。

日本にはまだ「安楽死」や「尊厳  
死」を認める法律はない。「安楽死」  
では、患者の苦痛を取り除くために  
死期を早める「積極的安楽死」を選  
択した医師が殺人と問われた事例も  
あるし、自分の意志で死を決めるの  
だから、自殺も「尊厳死」と認める  
べきだという意見もあるようだ。死  
に対する考え方は人それぞれ違うの  
だから、法律にして「こうです」と  
決めてしまうのは難しいのかもしれ  
ない。

ちなみに、無治療を選択した祖父  
は、今のところ大きな体調の変化も  
なく、元気に過ごしている。週末の  
たびに同窓会やカラオケなどの遊ぶ  
予定を入れてくる祖父を、母は「不  
良翁」と呼んであきれ顔だ。それで  
も僕は、そうできなかった祖母の分  
まで最幸の人生を満喫している祖父  
をたのもしく思う。いつまでも元気  
でいてほしい。